古事記

高天原

人には自然の木や石、水、あらゆるものに神様が宿るという考えがあります。
そして目の前の現象だけに振り回されず、自分の良心に従い真心を尽くす生き方が自然に受け継がれています。
祖先から受け継いだ宗教を超えた「おてんとうさまがみているよ」という子供でも分かる教え、
それは『古事記』の神々から学んだものでした。
日本で一番古く、国家が編纂した公的な歴史書を個人の表現でお伝えしています。
至らない点はどうかご容赦の程、宜しくお願い致します。

《おあねぃさまの愛》

『おねいちゃ～ん』
ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝ε＝┌(@^▽^@)┘

大喜びで高天原にまいのぼったスサノオを待っていたのは

背中には千本もの矢が入る矢立を背負い
わき腹には五百本も矢が入る矢立をつけて弓を振りたて

太ももまで地面にめり込むほどに踏み込んだ
男神の姿の天照大神でした
。・°°・(((((凹(◎O◎;)凹))))) ・°°・。

スサノオピンチ！！！
Σ(￣。￣ﾉ))))ﾉ

武装した天照大神はいいました
『スサノオよ、これは姉弟の再開ではない。

これからお前の心が本物になったか確かめてやる。
もしも邪心があれば
それを徹底的に叩き潰してやるから覚悟しなさい。』
(o｀O´)σ=σ=σ=σ

スサノオ・・・・
ブルル・・・((((；ﾟДﾟ)))))))ﾀﾗｰ･･･

アマテラスちゃんは
『スサノオが父の怒りに触れて
せっかく目が覚めたこのチャンスに
ハンパな親切心で甘えさせたら男になり損ねる。
スサノオの心を完全に磨きあげてやるのが私の務めだ』
と、
そんな思いで武装したんです。ψ(｀+´)ψ

その姿は貴いとも麗しいとも美しいとも恐ろしいとも
なんとも言葉では現せられない姿でした。
ﾟ*･*ﾟ (((o(*ﾟOﾟ*)o))) ﾟ*･*ﾟ

そこでスサノオは父のイザナギに叱られたこと、
おねいちゃまの国を荒そうなんて思っても無いことを
素直に話しました

このアマテラスねえちゃんの母のような愛は
いざという時には非常な力を出す強い愛です

たとえばね、
子供を正すために
涙をためながら泣くのをこらえてひっぱたく母
（心あたりある～～～～～…ヾ(ﾟ∀ﾟ)ﾉﾞ ）

例を挙げれば
赤穂浪士の母や妻の姿d(￣ ￣)

中江藤樹は江戸初期の儒学者で日本における陽明学の祖といわれています。幕末に陽明学を学ぶ志士たちが明治維新を成し遂げたことを考えると藤樹なくしては明治維新はなく、その母なくしては今の日本はなかったことになると言われています。

中江藤樹は修行中、
離れて暮らすお母さんの病気が心配で心配で
いてもたってもいられなくなって、薬を買って
こっそり村に帰ります。
家に辿りつくと、お母さんは降りしきる雪の中、
重い釣瓶で井戸の水を汲んでいる最中でした。
駆け寄る藤樹に気付いたお母さんは、

「男子が一度目標を以て家を出たならば、めったなことで帰ってきてはなりません!
大事な修行をないがしろにするような男は息子ではない」
(o｀O´)σ=σ
と、叱って薬も受け取らず家にも入れず
追い返しちゃうんです。
ヽ(￣д￣;)ノ=3=3=3

でもね、深い雪道をとぼとぼ帰るわが子の後姿を
母は涙を流して見送るんですね。
母の深い愛情を知った藤樹は母に感謝して、
学問に励み多くの師弟を育てました。

これぞ大和の母心!!
その大きな母心を汲んで孝行を尽くした藤樹も
大和の男心ですね～～
本当の優しさって真心からのもので
真心ってやっぱハンパない
愛と勇気あってのものなんですね～
(=´∀｀)人(´∀｀=)

愛と勇気**だけ**が友達の
アンパンマン

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

更にアマテラスネエは言うんです
『邪心が無いなら証拠を見せて』と

あるものを見せるのは簡単だけど
無いものを見せろって(￣◇￣;)

さすが、女子ならではの、
このセリフヾ(ﾟ∀ﾟ)ﾉﾞ
神代の時代からあったんですね～～

これに対するスサノオの迷回答は
次回でね。

きじこでした～～～(⌒▽⌒)ﾉ""ﾏﾀﾈｰ!!

「慰霊の日」の６月２３日、沖縄県糸満市の平和祈念公園で行われた沖縄全戦没者追悼式で、浦添市立港川中学校３年の相良倫子さんが読み上げた自作の「平和の詩」がインターネット上で反響を呼び多くの政治家や芸能人、アーティストら著名人がツイッターなどで詩の内容や朗読を絶賛しました。「平和の詩」の題名は「生きる」。
不戦を誓い、未来の平和を築く決意が込められている詩の内容はもとより、追悼式での７分半に及ぶ力強い朗読にも温かい拍手が送られました。

生きる

沖縄県浦添市立港川中学校　３年　相良倫子

私は、生きている。
マントルの熱を伝える大地を踏みしめ、
心地よい湿気を孕んだ風を全身に受け、
草の匂いを鼻孔に感じ、
遠くから聞こえてくる潮騒に耳を傾けて。

私は今、生きている。
私の生きるこの島は何と美しい島だろう。
青く輝く海、
岩に打ち寄せしぶきを上げて光る波、
山羊の嘶き、小川のせせらぎ、
畑に続く小道、萌え出づる山の緑、
優しい三線の響き、
照りつける太陽の光。

私はなんと美しい島に、生まれ育ったのだろう。
ありったけの私の感覚器で、感受性で、
島を感じる。心がじわりと熱くなる。

私はこの瞬間を、生きている。
この瞬間の素晴らしさが
この瞬間の愛おしさが
今と言う安らぎとなり
私の中に広がりゆく。

たまらなく込み上げるこの気持ちを
どう表現しよう。
大切な今よ
かけがえのない今よ
私の生きる、この今よ。

七十三年前、
私の愛する島が、死の島と化したあの日。
小鳥のさえずりは、恐怖の悲鳴と変わった。
優しく響く三線は、爆撃の轟に消えた。
青く広がる大空は、鉄の雨に見えなくなった。
草の匂いは死臭で濁り、
光り輝いていた海の水面は戦艦で埋め尽くされた。
火炎放射器から吹き出す炎、幼子の泣き声、
燃えつくされた民家、火薬の匂い。
着弾に揺れる大地。血に染まった海。
魑魅魍魎の如く、姿を変えた人々。
阿鼻叫喚の壮絶な戦の記憶。

みんな、生きていたのだ。
私と何も変わらない懸命に生きる命だったのだ。
彼らの人生を、それぞれの未来を。
疑うことなく、思い描いていたんだ。
家族がいて、仲間がいて、恋人がいた。
仕事があった。生きがいがあった。
日々の小さな幸せを喜んだ。
手をとり合って生きてきた、
私と同じ、人間だった。

それなのに。 壊されて、奪われた。
生きた時代が違う。
ただ、それだけで。 無辜の命を。
あたり前に生きていた、あの日々を。
摩文仁の丘。
眼下に広がる穏やかな海。
悲しくて、忘れることのできない
この島の全て。

「平和の詩」を朗読する
港川中学校３年の相良倫子さん
糸満市摩文仁の平和祈念公園

私は手を強く握り、誓う。
奪われた命に想いを馳せて心から、誓う。

私が生きている限り、
こんなにもたくさんの命を犠牲にした戦争を、
絶対に許さないことを。
もう二度と過去を未来にしないこと。
全ての人間が、国境を越え、人種を越え、宗教を越え、
あらゆる利害を越えて、平和である世界を目指すこと。
生きる事、命を大切にできることを、
誰からも侵されない世界を創ること。
平和を創造する努力を、厭わないことを。

あなたも、感じるだろう。
この島の美しさを。
あなたも、知っているだろう。
この島の悲しみを。
そして、あなたも、
私と同じこの瞬間（とき）を 一緒に生きているのだ。
今を一緒に、生きているのだ。

だから、きっとわかるはずなんだ。
戦争の無意味さを。本当の平和を。
頭じゃなくて、その心で。
戦力という愚かな力を持つことで、
得られる平和など、本当は無いことを。
平和とは、あたり前に生きること。
その命を精一杯輝かせて生きることだということを。

私は、今を生きている。
みんなと一緒に。
そして、これからも生きていく。
一日一日を大切に。
平和を想って。平和を祈って。
なぜなら、未来は、この瞬間の延長線上にあるからだ。
つまり、未来は、今なんだ。

大好きな、私の島。
誇り高き、みんなの島。
そして、この島に生きる、すべての命。
私と共に今を生きる、私の友。私の家族。

これからも、共に生きてゆこう。
この青に囲まれた美しい故郷から。
真の平和を発進しよう。
一人一人が立ち上がって、
みんなで未来を歩んでいこう。
摩文仁の丘の風に吹かれ、私の命が鳴っている。
過去と現在、未来の共鳴。
鎮魂歌よ届け。悲しみの過去に。
命よ響け。生きゆく未来に。
私は今を、生きていく。